

日本における 学校掃除文化の成立背景 —神道儀礼と掃除の類似性からの考察—

外国語学部 国際文化交流学科 4年

和田 素

はじめに

我が国においては小学校から高校に至るまで学校教育において、生徒が過ごすスペースを生徒の手によって掃除することは「当たり前」となり、誰もが経験したこのある国民的な共通体験である。しかし、その共通体験は海を越えれば決して「当たり前」なものではなく、それどころか極めて異端なものであると受け止められることもある。

高校時代、私はイタリア北部のトリエステ市に1年間滞在し、現地の国立高等学校に通学をしていた。そこでは日本では毎日放課後に行われる掃除の時間というものは存在せず、掃除は生徒ではなく外部委託の清掃員の手によって行われていた。小学校から日本で過ごしてきた私にとって、生徒自身が学校掃除を行わないという光景にカルチャーショックを覚えたのが強く印象に残っている。また、中東のテレビ局であるアルジャジーラは日本の小学校における学校掃除文化を扱った映像をインターネット上に公開し、その異端さを世界に向けて発信し、世界各国から驚きを表すコメントが多数寄せられていた。

日本における学校掃除文化について、在日外国人の視点で書かれたThe Japan Timesの記事“Kids get down to classroom clean-ups”⁽¹⁾においてはアメリカ出身である筆者の日本での経験について以下のように記されている。

“A few weeks before my son started first grade
...I read the list of school supplies I need to buy
...when got to the item that always strikes me as
odd: zokin”

私の息子が小学校に入る数週間前、入学のために用意すべき物のリストを見ていたら驚きとともに「雑巾」に目が留まった。

“American children don't clean at school. There are adult employees called janitor who do all the cleaning”

アメリカ人の子どもたちは学校掃除をしない。大人の清掃員がいて、彼らがすべての掃除を担っている。

“It's a little hard for non-Japanese to grasp why kids should be cleaning at school”

日本人でない人にはなぜ子どもたちが学校で掃除をしなければいけないのかを理解するのは簡単ではないだろう。

生徒自らが学校掃除を行う日本の小学校入学に際して用意すべき物に掃除道具である「雑巾」が含まれていることに驚いたという経験から、日本人以外の人々にとって日本における学校掃除文化は特異なものである、と記している。

我々日本人は学校掃除を行うということに対して疑念を抱くことはないだろう。しかし、諸外国、特に欧米の人々からしてみればこういった我々の共通体験とも言える「学校掃除」は奇異なものであると受け止められることもあるのである。本論文は、我が国の学校教育現場において「掃除」が至極当然の如く行われている理由を神道的な背景から追求し、そこに日本思想に起因する独自性を見出すことを目的とする。

1. 国内外における学校掃除の実施状況

学校掃除と神道的思想の関連についての考察を始める前に、日本国内と諸外国における学校掃除の実施状況をデータから見たいと思う。なお、本章において学校掃除の担い手について考察する際には沖原の提唱する、その3類型である「清掃員型」、「清掃員型・生徒型」、「生徒型」⁽²⁾（沖原，p.14）に分ける。

1-1. 日本国内における学校掃除の実施状況

日本国内の小学校における学校掃除の実施状況について、東京学芸大学が行った調査「日本と中国の小学校における掃除の取り組みの実態と相違」(2016) には以下のように述べられている。

- a. 小学校では、学校の掃除を児童が行っているのか、行っているとしたらどのくらいの頻度で行っているのかについて尋ねた。その結果、日本も中国も、児童による掃除を行わない小学校は皆無に近かった。
- b. 掃除の回数は、中国では年数回が21%、毎日ではないが定期的には29%、毎日50%で、半数が毎日掃除を行っていたが、毎日行わない小学校も半数あることになる。一方、日本ではほとんどが毎日掃除を行っていた。
- c. 日本の小学校は、ほぼ全ての学校において児童自らが掃除を行い、その頻度も「ほとんど毎日」と記されるほど日常的に行われているのである。

さらに、日本の小学校における掃除の中でも「大掃除」の頻度に関しては、「年間1～2回が24%、3～4回が76%となり、日本の小学校では毎日の掃除に加えて学期ごとに定期的の大掃除が行われていると推測できる」と述べられている。確かに、自身の小学校生活を振り返れば夏休みや冬休みの前は学校中を大掃除した記憶がある。また、こういった「大掃除」は学校に限られたものではなく、各家庭でも同様に行っているのは日本人なら誰も

が体験したことのあることだろう。日本の小学校においてはほぼ毎日掃除を行い、また、節目ごとには大掃除も定期的に行われており、そのような掃除の在り方は日本文化の持つ特徴的な一面であると言えるだろう。

1-2. 国外における学校掃除の実施状況

日本比較教育学会が行った調査「各国の学校掃除に関する比較研究」(1977)によると、先述した3類型に属する国々は以下の通りである。

- a. 清掃員型：イギリス、フランス、イタリアといった西欧諸国、アメリカ、ブラジル等の北中南米、トルコやモロッコなどの中近東・北アフリカ、ニュージーランド、オーストラリア。
- b. 生徒型：日本、韓国、中国、インド、インドネシア、バングラデシュ等アジア、ウガンダ、ガーナ、カメルーン等アフリカ。
- c. 清掃員・生徒型：ソ連、チェコスロバキア、ポーランド、キューバ等社会主義国家。

欧米や中東諸国では児童・生徒が掃除を行わないが、アジアやアフリカにおいてはその逆となっている⁽³⁾。ここで注目したいのが、「生徒型」に属するアジアの国々である。これらの国々は歴史的に仏教の影響を強く受けたという共通点があり、参考文献においても「仏教国ないし歴史的に仏教的伝統を有する生徒型の国では、仏教思想、とくにその掃除観が生徒による学校掃除を規定しているものと考えられる。」（沖原，p.42）と記されており、掃除文化の形成に宗教的な価値観が影響を及ぼしているといえるだろう。しかし、我が国における掃除文化の形成について考察する際、仏教のみに着目すれば良いのだろうか。そこで考えられるのが我が国の伝統宗教の「神道」である。外国から輸入された宗教である仏教に対し、神道は日本で育まれてきた独自の宗教である。我が国特有の掃除文化を理解するため、次章以降は掃除と神道の関係性について考察を深めていきたい。

2. 掃除と神道儀礼

掃除の目的、それは言うまでもなく空間に溜まった「汚れ」を除去し、清潔な空間を作り出すことである。箒や雑巾といった道具を用いて「汚れ」を除去するという行為は、神道において罪穢を祓いさる「みそぎ」や「はらい」、「きよめ」といった儀礼行為と非常に類似した行為であると考えられる。人間が主体となり、不要なものを除去しようというこれらの行為であるが、掃除と神道的儀礼の間にある決定的な相違点は除去を行う対象物が「物理的」であるか「心理的」であるか、言い換えれば「可視」か「不可視」か、という点である。我々が日常的に行う清掃においては「物理的」であり「可視」なゴミを集め、捨てることで清潔な空間を創出している。しかし、神道儀礼において「祓い」を行う対象物は物理的な「汚れ」のみに限定されず、「穢れ」や「罪」といったものも含まれており、それらは「心理的」かつ、「不可視」なものである。神道儀礼において祓い去る対象であるとされる「罪穢」はどのような働きを持つものであると考えられるのだろうか。

波平は穢れの働きの代表的な理論として金子と岡田の理論⁽⁴⁾を総合した上で以下のように述べている。

ケガレは災い（この場合は死をはじめとして人間の不幸のさまざまをいう）をひき起こし、しかも死や病気や洪水や不作などの災いそのものもまたケガレであり、ケガレが新たなケガレを、災いは新たな災いをもたらすという、ケガレと災いの循環論を古代の日本人は持っており、そのケガレと災いの循環の輪を断ち切るものとしての儀礼が発達したのだと両者ともに考えているように思われる（波平、p.295, 296）。

穢れが天変地異や病気など人間にとっての不幸である「災」の原因となり、その「災」がまたあらたな穢れを生み出す。そして、その循環を阻止するための方法として儀礼が発展した、ということである。そのシステムを波平は「災因論」と呼んでいる。

3. 「祓い」と「掃除」の関係性

宗教学者である丸山は「祓い」と神事としての掃除について「古代には重要視され、現在でも祭祀の次第に現れることを我々は知る事ができる。即ち、祭祀の一部として捉えられており、あるいは、それが独立した祭祀として成立している」と述べている（丸山、p.19）。つまり、神道においては、古代から現代に至るまで掃除が「祓い」という神事の一部として継続的に執り行われているのである。また、沖原は神社が掃き清められていることに日本人が「清々しさや尊厳さ」を感じるという神道的「清浄感」は日本人の持つ伝統的な掃除観に深く根差していると述べている（沖原、p.28, 43）。以上のことから、日本人の行う掃除と神道的・伝統的な清浄感は密接に係わりあっていると言えるだろう。

本章においては、神道儀礼として行われている今日の我が国における清掃行為に影響を及ぼしたと考えられる神道儀礼について、「身体」と「空間」の二つを対象としたものから考察を行いたい。

3-1 「身体」を対象とした儀礼

3-1-1. 大祓

神道儀礼の中でも「身体」を清めることを目的とした儀礼の代表例ともいえるものが「大祓」である。この儀礼に関して、『古事類苑』には以下のように記載されている。

大祓ハ、毎年六月十二月晦日、皇城ノ朱雀門ニテ行ハル、乃チ百官男女ヨリ初メテ、天下萬民ノ不知不識ノ間ニ犯セル所ノ、種々ノ罪穢ヲ除キ去ランガ為ニ行ハル、ヲ以テ大祓ト云フ。

毎年六月と十二月に人々が見ず知らずのうちに犯した罪やそれに伴って生じた穢れを祓い除こう、というものが大祓である。ここで言う「罪」とは「天津罪」⁽⁵⁾と「国津罪」⁽⁶⁾の二つである。両者について本文中においては詳細に述べることはしないが（脚注参考）、簡単にまとめれば前者は農耕社会の秩序を掻き乱すとされるもの、後者は病や自然

災害、人間を含む生物へ危害を加えることであると言えよう。特に、六月に行われる「名越しの祓え」においては半年間の罪や穢れを取り除くべく、茅萱で作られた輪を潜ることで罪穢を祓い、災いを避けることが出来るとされる「茅の輪くぐり」⁽⁷⁾や、人体の形をした紙である「人形」(形代)⁽⁸⁾に罪穢をこすりつけて流すことで祓いが行われる。

「茅の輪くぐり」と「人形」(形代)を用いた祓いの両者に共通しているのは日常生活を通じて身体に蓄積した罪穢を祓い落とすということである。先に引用した古事類苑に記載された大祓の定義にもあるように、人々は「不知不識ノ間」に罪穢を蓄積している。その蓄積された罪穢が災いの原因となるという波平の「災因論」に基づいた儀礼であると考えられる。

3-1-2. 死の穢れ

身体の清めを目的とした儀礼としては大祓のような大規模かつ全国的に行われているものだけでなく、全国各地の民間信仰レベルにおいてもいくつかの例を見ることができる。千葉県市原市では墓穴掘り後に酒一升と豆腐一丁で「キチョッパラエ」を行い、その後喪家で入浴するという。また、成田市においても墓穴掘り後に酒と豆腐を用いて身を清める。こうしたいわゆる死の穢れに対する意識について、波平は以下のように述べている。

死のケガレというものを、何かの汚れ、かなり具体的で即物的な汚れとしてとらえ、以上の儀礼はその汚れを取り除く、落とす、払うという意味を持っている。墓堀の後に風呂に入るなどの事を考え合わせると一層それは明らかである (波平, p.53)。

穢を「汚れ」としてとらえ、除去しようという行動は掃除において空間に蓄積されたゴミを取り除くという行為と類似していると言いうことが出来る。しかしまた、波平は死のケガレに関して「危険な状態を作り出す、引き起こすようなもの」として考えられているようだ、と論じている。つまり、穢れは即物的な汚れであると同時に、災いの原因でもあるのである。罪穢を災いの原因として捉え

る「災因論」は国家レベルで行われる大祓と民間レベルで行われる儀礼の両者に共通するモチベーションとなっていると考えられる。

3-1-3. 「禊」としての沐浴

丸山は沐浴という作法に関して、それは「湯に体を沈め、あるいは、湯を体に被る事で体の穢を祓うものである」と述べ、さらにその主眼は湯に体を沈めることではなく、身体に掛けることであろうと推測できる、としている。(丸山, p.95) その例として挙げられているのが稲の収穫を祝い、豊穣を祈る式典である新嘗祭⁽⁹⁾や、天皇が即位のち初めて新穀を天照大神をはじめ天神地祇に奉り、自らも食す大嘗祭⁽¹⁰⁾の際に天皇が行う儀礼の一つである。新嘗祭では初日の夕方、大嘗祭では戌の刻に天皇が「天羽衣」⁽¹¹⁾と呼ばれるものを着用し、深さ五十センチほどの湯船に入り、天皇に湯を掛ける、という儀式が行われる。いずれの儀礼も、「コメ」の豊穣や収穫を祈る祭祀者である天皇の身を清めるために行われる。

このように水を用いた清めの例は他所でも見られ、伊勢神宮への参拝者が参拝前に宮川に身を浸したり、諸社において祭祀者が祭祀に先立つ斎戒の場で潔斎⁽¹²⁾を行うなどの例がある(丸山, p.96)。潔斎に関しては、「神宮」⁽¹³⁾においても「かかり湯」のような方法で行われている(小野, p.23)。伊勢神宮において参拝者が宮川で身を清めたり、祭祀者が潔斎を行うのと同様の形態は沖ノ島において神職者や参拝者が参拝前に島の前の海で全裸になって行う「禊」においてもみられる。

このように、水ないし湯を用いて身体を清めるという行為である沐浴は「禊」の代表的な例の一つであると言えるだろう。以上の諸例に共通するのは神に近づく前に身を清めることが必要であるとされているということだ。それは、神が穢れを嫌い、災を引き起こすと考えられていたからである。

以上、本章においては大祓と死の穢れを祓う儀礼、そして「禊」についての考察をしてきた。大祓においては日ごろの生活を通じて蓄積された罪穢を祓うことで罪穢から生じると考えられている災を忌避し、死の穢れを祓う儀礼においては身近

で起こった死から発生する穢れを忌むことで災から遠ざけようとするとした。そして、「禊」においては穢れを嫌うと考えられている神に近づく際に神による災いを避けるため、水や湯を用いて行うものであると結論付けた。

罪穢を災いの原因であるとする「災因論」と、穢れを嫌う神に近づく前に罪穢を除去しようという沐浴に代表される「禊」に共通する点は両者共に日常生活を通じて身体に蓄積した罪穢が災いを引き起こす、という考えを持っているという点である。しかし、前者の場合は罪穢が直接的に災いを引き起こすとされているのに対し、後者は罪穢を嫌う神が災いを引き起こす、つまり間接的であるということである。両者のこの関係に関しては興味深い問題ではあるが、本論文では熟考せず、今後の課題としておきたいと思う。

3-2. 「空間」を対象とした儀礼

前章においては「身体」に蓄積した罪穢、そこから生ずる「災気」を祓い清め、人々に降りかかる「災」を回避するというを目的とした神道儀礼に着目した。本章においてはその対象を私たちが生活している場所、すなわち「空間」に変えて考察を行いたい。

3-2-1. 大祓

ここで注目したいのが前章(3-1-1)で触れた大祓である。大祓の祝詞(六月の晦の大祓)において祓われるとされる「国津罪」に含まれる「昆ふ虫の災」、「高つ神の災」、「高つ鳥の災」は、いずれも明確に「災」であると考えられるが、金子はこれらの災に関して「虫や神や鳥が人間に興へる力を有った災気を指すのであろう。さうでなければ、これを祓ふという意味は考へられないことである」(金子, p.455)と述べている。すなわち、「身体」について考察した際と同様に災自体を祓うのではなく、罪穢の存在によって生じる「災気」、災を引き起こす力を持った「気」を祓うことで平穏な生活を手にしようとしていたのである。

大祓の祝詞に記されている三つの災についてそれぞれどのようなものであるのかについて考察した

い。まず、「昆ふ虫の災」であるが、瀬戸はこれについて「蛇やむかでなどの地面を這ふ虫の災禍」であるとし、「高つ神の災」は雷による災禍、そして「高つ鳥の災」は空高く飛ぶ鳥による災禍であるとしている。これらのいずれもいわゆる天災であり、その災いの形が具体的に現れ、誰もが認めることのできるものである。大祓のシステムについては前章で考察したのでここでは触れないが、大祓を通じて祓われるものは知らず知らずの内に蓄積した「罪穢」に限らず、天災をも「罪」の一部として捉え、祓い去ろうとしていたと考えられる。

3-2-2. 煤払い

「空間」を清める儀礼について、次いで挙げたいのが煤払いである。煤払いとは、簡単に説明すれば年末に行う大掃除のことである。しかし、それは単なる衛生的な理由から行われるものではなく、神道儀礼的な必要性から行われているものである。煤払いについて、丸山はそれを「清掃の神事」とした上で以下のように論じている。

殿内の清掃に関しても、古代には重要視され、現在でも祭祀の次第に現れることを我々は知ることが出来る。即ち、祭祀の一部として捉えられており、あるいは、それが独立した祭祀として成立している。煤払祭などと呼ばれることがある祭祀であり、あるいは内々陣の清掃に関しての神事も諸社には見ることが出来る(丸山, p.19)。

煤払いが神道における祭祀の一つとして認められ、古代より続けられてきたということが分かる。煤払いの定義として国史大辞典には「屋内の掃除を行い、同時に神棚を祓い清めて正月の準備を始める年末の行事。単なる衛生上の大掃除ではなく、一年間の厄を祓い正月の準備にかかるという積極的意味を持つものでもあった」⁽¹⁴⁾と記されている。つまり、一年間蓄積された罪穢を取り除こうというものである。掃除の形態を取るものではあるが祓いを行う神道儀礼的な意味を持つものであると言えるだろう。

さらに、年末に行うという点において触れてお

きたいのが「トシ神様」の存在である。「トシ神様」とは「正月に吉方から来臨して年中の安全と豊作とを約束する神」⁽¹⁵⁾であり、その来訪によって一年間の安定した生活がもたらされるのである。そして、神である以上穢れを嫌う存在であるとも考えられる。そのため、人々は煤払いを通して汚れ、すなわち穢れを取り除き、年神様を迎えようとするのであると考えられる。

本章においては「空間」の清めを対象とした神道儀礼についての考察を行った。祓い清められるべきものは人間が知らず知らずの内に蓄積した罪穢のみでなく、「国津罪」に登場する三つの災のような自然災害も含まれているとした。また、正月に「安全と豊作とを約束する神」であるトシ神様を迎えるべく行う煤払いについても考察を行った。一見すれば衛生的な見地から行われる年末の大掃除であるが、その目的は神が嫌うとされる汚れ、ないし穢れを取り除くことで「年中の安全と豊作とを約束する神」であるトシ神様をお迎えする為のものであるとした。大祓、煤払いのいずれも儀礼的に不要物を取り除こうというものであり、今日の我が国における掃除文化と近いものがあるのではないだろうか。

おわりに

本論文においては世界的に見て類稀である日本における学校掃除文化の背景にある思想を解き明かすため、神道に着目して考察を行った。神道において行われる大祓や煤払いといった大規模な儀礼、それらに加えて日本各地において民間レベルで行われている儀礼について考察を進める中で、掃除という行為とそれらの儀礼において「祓い清める」という行為が極めて類似しているということを見出した。本論中でも述べた通り、掃除においては特定の空間に蓄積されたゴミを取り除くことで清潔な、清浄空間を創出する。それに対し、大祓では人々の日常の行いによって蓄積された「罪穢」を取り除くことで災いを回避し、平穏な生活を実現しようとしている。また、煤払いにおいては正月を迎える際に屋内を掃除し、汚れ、すなわち穢れを取り除くことで年神様をお迎えする準備をする。一般的な認識における掃除と本論中で取

り上げた各神道儀礼に共通するのは、不要なものを取り除き、より良い空間を創出しようという目的意識にあるのではないだろうか。そのような観点から、日本の掃除文化の根底には伝統的に行われてきた神道儀礼が存在し、掃除はある種の儀礼とも言えるのではないだろうか。そして、このような儀礼的な在り方が日本の学校現場における掃除文化の形成に影響を及ぼしたと考えることができるだろう。

本論文においては神道的な側面のみに着目したが、無論仏教的な側面からも考察を行わなければ掃除文化の本質を解き明かすことは出来ないのも、それは今後の課題として残したいと思う。

註

- (1) Kids get down to classroom clean-ups, The Japan Times, NOV 30, 2001
<https://www.japantimes.co.jp/life/2001/11/30/lifestyle/kids-get-down-to-classroom-clean-ups-2/#.Wd3zFVt-qUk>
- (2) 清掃夫型：清掃夫が学校の清掃を行い、生徒には学校の掃除をさせない国。
清掃夫・生徒型：基本的には清掃夫に学校の掃除をやらせるが、生徒にも掃除を行わせている国。
生徒型：生徒に学校の掃除を行わせている国。
- (3) アジア、アフリカの一部の発展途上国においては財政上の問題から清掃夫を雇うことが出来ず、生徒が掃除を行っている国もあると思われる。
- (4) 岡田は不浄を「穢れ」「罪」「災い」の三つの要素から成るものとし、金子は「けがれ」を岡田の不浄とほぼ同じ意味で用い、古代の日本人が「けがれ」が「わざわひ」をひき起こす恐れのあるものと考え、また見方によっては「けがれ」は「わざわひ」と同じものとしてとらえたことを示唆している。
- (5) 国津罪とともに日本最古の犯罪を包括的に示す概念。畔放（あはなち）・溝埋（みぞうめ）・樋放（ひはなち）・頻蒔（しきまき）・串刺（くしさし）・生剥（いきはぎ）・逆剥（さかはぎ）・屎戸（くそへ）という諸罪が含まれている。国史大辞典，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz014400>（2017年10月11日参照）
- (6) 天津罪とともに日本最古の犯罪を包括的に示した概念。生膚断・死膚断・白人・胡久美・己母犯罪・己子犯罪・母与子犯罪・子与母犯罪・畜犯罪・昆虫乃災・高津神乃災・高津鳥乃災・畜伏志・蠱物為罪の諸罪が包括されている。国史大辞典，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz151480>（2017年10月11日参照）
- (7) チガヤまたはわでで作った大きな輪をくぐり、疫病をまぬがれようとする儀礼。
- (8) 人間の身代わりとした人形。多く紙製で、これに罪・けがれ・災いなどを移して祓えをし、川や海に流す。
デジタル大辞泉，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001003323500>（2017年10月11日参照）
- (9) 天皇が新穀を天神地祇（ちぎ）に供え、みずからもそれを食べる祭儀。デジタル大辞泉，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001009580400>（2017年10月11日参照）
- (10) 天皇が即位後初めて行う新嘗（にいなめ）祭。その年の新穀を天皇が天照大神（あまてらすおおみかみ）および天神地祇に供え、自らも食する、一代一度の大祭。祭場を東西2か所に設け、東を悠紀（ゆき）、西を玉基（すき）と称し、神に奉る新穀をあらかじめ卜定（ぼくじょう）しておいた国々の斎田から召した。おこなまつり。デジタル大辞泉，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001011182800>（2017年10月11日参照）

- (11) 天皇が大嘗会(だいじょうえ)などの祭事で沐浴(もくよく)するときにつける湯かたびら。デジタル大辞泉, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001000467100> (2017年10月11日参照)
- (12) 法会・写経・神事などの前に、酒肉の飲食その他の行為を慎み、沐浴(もくよく)などして心身を清めること。物忌み。デジタル大辞泉, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001005617700> (2017年10月11日参照)
- (13) 伊勢神宮を指すものと思われる。
- (14) 煤払い, 国史大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz266990> (2017年10月11日参照)
- (15) 年神, 国史大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz348160> (2017年10月11日参照)

参考文献

- 沖原豊編著『学校掃除 その人間形成的役割』学事出版、1978年12月
- 丸山顕誠『祓いの神事 神話・理念・祭祀』三弥井書店、2015年5月
- 波平恵美子『ケガレ』講談社、2009年7月
- 瀬尾芳也『災気を祓ふということ ―大祓詞の天津罪・国津罪を通して―』神道宗教学会、2016年4月
- 金子武雄『延喜式祝詞講』武蔵野書房刊、1951年
- 小野祖教『神道の秘儀 下』平河出版社、1982年5月
- 大竹美登利、全瑛『日本と中国の小学校における掃除の取り組みの実態と相違』東京学芸大学、2016年2月
- 沖原豊、他『各国の学校掃除に関する比較研究』日本比較教育学会、1977年3月